

困難の最中にいる

家族や子どもたちと「物語」

山野良一

真夏の夜中に子どもの泣き声と母親の叱り声が繰り返されていくという内容の通報が近隣から入り、ある児童相談所で働くぼくは家庭訪問を実施した。子どもが学校から帰っているはずの夕方の時間に訪問したが、呼び鈴を鳴らしても誰も出てこない。家の中に誰かがいるような気配や音があるのだがまったく応答はない。仕方がないので、児童相談所あてに連絡をいただきたい由の手紙をドアのところに挟みぼくは連絡を待った。

数日後、母親から連絡が入った。仕事から家に戻った時間で良いので家庭訪問をさせて欲しいと伝えたぼくに、母親は「夜九時であれば良いです」と言う。

「夜九時」と言われて、児童相談所に対する嫌がらせかもしれないとぼくは瞬間思った。しかし、後日家庭訪問し母親から事情を伺うと、この母親がとても真面目な方で、「夜九時」にしか家に帰れない事情も分かっている。

「夫は、事業に失敗し多額の借金を残したまま数ヶ月前からいなくなってしまうんです。それまでも私は派遣

で工場で働いていましたが、三人の子どもたちを抱えているし家のローンも残っていて、工場の仕事が終わってからスーパーでのバイトもしています。子どもを以前は学童保育に行かせていたのですが、費用がもったいないので、子どもに話して辞めてもらいました。今は子どもたちだけで留守番です。そうしないとやっていけないのです。」

母親は僕にこうした話をしながら、母親の帰りを待ちわびながら居間で寝込んでしまった一番下の小学一年生の女の子の背中をさすっている。子どもには、一日の疲労感と同じ時に母親がそばにいることに安堵していることが伝わってくる。できるなら、このまま永久に母親に触れていたいよねがっているかのようだ。

通報の内容を母親に尋ねると、この女兒がいつも母親が帰る前に寝込んでしまうので、嫌がるのを起こしてお風呂に入れたり、部屋に連れて行って布団の中に寝かす時に、どうしても子どもが泣いてしまうのだと言う。ぼくは、あ